

メディア化時代の「宗教」：デリダにおける「世界ラテン化」(1)

田島, 樹里奈 / TAJIMA, Jurina

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Intercultural Communication, Hosei University
Ibunka / 異文化. 論文編

(巻 / Volume)

16

(開始ページ / Start Page)

93

(終了ページ / End Page)

118

(発行年 / Year)

2015-04

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010755>

メディア化時代の「宗教」：
デリダにおける「世界ラテン化」(1)
Religion and Mediatization :
Globalatinization in Derrida's
Philosophy

法政大学国際文化研究科博士後期課程

田島樹里奈

TAJIMA Jurina

Abstract: The concept of mediatization is used by a variety of thinkers to refer to the process of structural changes in modern society that have spread through media technologies. Media not only influences general mass media, but also has the power to blur the boundaries between the private and public spheres. This article considers the philosophical relationship of mediatization to religion, rather than to the social sciences or media studies, and therefore aims to unearth the fundamental problem behind the phenomenon of “globalatinization”. In order to understand the concept of mediatization, this paper begins by presenting the theory of “mediatization of religion,” as argued by Stig Hjarvard. It then examines how this concept’s implications are too broad to be expressed by just one word. Although mediatization is often discussed as a unique phenomenon in recent society, the philosopher Jacques Derrida had already suggested some characteristics of the mediatization of religion during the 1990s. He argued that there is an absolute singular in the power and structure of Christian mediatization, and he proposed calling this process “globalatinization.” This article will consider the meaning of mediatization in reference to Derrida’s texts. In particular, his article “All Above No Journalists!” will be examined, in

its apparent Christian paradigm. In addition, Derrida's article "Faith and Knowledge," a text that argues that the concept of religion should be understood etymologically, where the deconstructed meaning of the word is "a persistent bond that bonds itself" will be examined. Moreover, this article will discuss Derrida's statement about the relationship between media and the secret as "the ab-solutum," media and spectralization as "the visible invisible," and both relationships' connection to religious structure, by referencing "Echographies of Television" and "Specters of Marx." Finally, this paper will provide a consideration of religion amidst the modern concept of mediatization.

Keywords: Derrida, mediatization, religion, globalatinization, specter

はじめに

近年、YouTube、Facebook、Twitter、Instagram など様々なメディアを駆使しながら、急激に活動勢力を広げているのが、イスラム教スンニ派過激派組織「イスラム国 (IS, ISIS, ISIL¹)」を名乗る集団である。彼らはソーシャルメディアの公共的性質をいち早く採用し、世界 80 개국とも言われる国々から外国人義勇兵を集めている。彼らは、これまでのイスラム系過激派組織とは異なり、子供と戯れる映像や捕虜をジャーナリストに見立てた映像を用いるなどして巧みにプロパガンダを発信し、リクルートをかけている。その効果は絶大で、多くのヨーロッパ系メンバーやアジア系ジハードなども組み込むほど影響力をもっている。しかも「イスラム国」には、IT 技術に精通したメンバーが数多くいるため、ウェブを利用するなどのテロリストグループよりもかなり効果的にソーシャルメディアを使用している。さらに、UK 版ハフィントン・ポストによれば、イスラム国は、「The Dawn of Glad Tidings (「吉報のはじまり」の意)」と呼ばれるアンドロイドモバイル機器のためのアプリも開発した。このアプリのユーザーは、イスラム

国の様々な活動に関する最新情報を知ることができる。代わりに、そのアプリは、サインアップしているすべてのユーザーアカウントから定期的にツイートを送る許可を「イスラム国」に対して与えているという²。宗教テロリズムは組織そのものがグローバル化し、マスメディアだけでなくソーシャルメディアを媒介することによって、世界中の一般市民にまで触手を伸ばしているのが現状だ。そして日本もその例外ではない。

周知のとおり、ソーシャルメディアが普及する以前、宗教とマスメディアは、長い間ある種の共生関係を保ってきた。特にアメリカでは、キリスト教のテレヴァンジェリスト（テレビ伝道師）や諸々の宗教番組に代表されるように、ラジオやテレビなどのマスメディアは、布教活動をする宗教にとって圧倒的な伝達力と扇動力をもっていた。また時代を遡れば、15世紀にグーテンベルクの活版印刷技術が神の言葉を伝える^{メディア}媒体として聖書を印刷できるようになったときから、宗教とマスメディアはある意味で表裏一体の関係にあった。メディア戦争と呼ばれた湾岸戦争から24年、そしてハリウッド映画のようなスペクタクル性を見せつけたアメリカ同時多発テロから14年経った2015年の今日、世界は新たな局面を迎えようとしている。今やメディアは、たんにマスメディア一般を意味するものではなくなったばかりか、私的空間と公的空間の境界線をも曖昧にさせる力を持つようになった。これまでも度々言われてきたことだが、まさに今、遠隔技術としてのメディアが陰に陽に新たな力を持ち始めている。

以上のようなメディア社会を生きるわれわれが、「メディア」について考えるべきこととはどのようなことだろうか。筆者としては、哲学的な考察を試みたいと考えている。というのも、哲学的に考察することで、現象の背後に埋もれた、より根本的な問題にアクセスできると考えているからだ。「自分の生きる時代を考える」ためにも、現実と真摯に向き合うためにも、哲学的な考察が必要である。

そこで本稿では、J・デリダのメディアと宗教に関する思想を検討する。デリダは90年代からメディアをめぐる諸問題について様々な角度から注意深く論じていた。本稿はまず、現代におけるメディアと宗教との関係に焦点を絞りながらも、いわゆるメディア論や社会学の分野では語られることのない哲学的側面にも光を当てる。それを通じて、メディアと宗教との間に内在するある種の危険性について考察したい。

本稿の構成は以下の通りである。第一に、メディア学の観点から論じられたS・ヤーワード³の「宗教のメディア化 (The Mediatization of Religion)⁴」という論考を取り上げながら、「メディア化 (mediatization⁵)」概念と宗教との関わりについて検討する。これまでも様々なメディア論が展開されてきたが、2000年以降とりわけ西洋社会においては、「メディアタイゼーションメディア化」という概念をめぐる議論が盛んに行われている。現在ではメディアに関わる問題を論じるためには、もはやこの概念を避けて通ることはできないと言っても過言ではない。筆者が取り上げるヤーワードは、この概念に早くから注目し、概念の発展に貢献した一人でもある。また近年の現象としてのメディアタイゼーションメディア化を宗教との関連で論じているのは、管見に触れた限りでは彼が最初である。またヤーワードだけでなくメディアタイゼーションメディア化概念の最近の議論との関係で、J・シュトレムバック⁶の分析なども参照する。

しかし実は、以上のようなメディアタイゼーションメディア論的な観点から「メディアタイゼーションメディア化」概念が注目される以前にすでに、デリダは哲学的な視点から宗教のメディアタイゼーションメディア化を論じていた⁷。そこでデリダは、全ての宗教にメディアタイゼーションメディア化の現象があることを認めながらも、キリスト教のメディアタイゼーションメディア化の力と構造には絶対的な特異性があることを指摘していた。

こうした点を踏まえて第二に、デリダがメディアや遠隔テクノロジーと宗教との不可分な関係について語った論考を参照しながら、「宗教 (religion)」の特異性を明らかにする。またデリダが、E・バンヴェ

ニストを参照しながら「religion」語源に遡り、その語が本質的にキリスト教的なものであること、そして「re-」という接頭辞にこそ重要な意味が含まれていると考えた点に触れる。

そこから第三に、キリスト教が、メディアの原義およびその用法と密接な関係があることを指摘する。というのも、デリダによれば、キリスト教に見られる宗教的な構造は遠隔メッセージの構造とアナロジーの関係にあるからだ。つまりデリダの見解では、受肉や聖餐の構造が、キリストのスピリチュアル化であり亡霊化であると同時に、受肉や聖餐の構造もキリストの「メディア化」であると言えるからだ。その意味でメディアもまた本質的にキリスト教的である。端的に言えば、「宗教」もメディア（あるいはメディア化^{メディアタイゼーション}）もキリスト教的であり、キリスト教圏に属しようとして属していなからうとわれわれは知らず知らずのうちに「キリスト教化」している。デリダはそれを「世界ラテン化（globalatinization）」と呼ぶ。

以上から最後に、デリダの「信仰と知」について論じたS・マルジェルの論考を参照しながら、メディア化された現代を生きるわれわれの問題として、筆者なりの考えを簡単に述べたい。

1. ‘Mediatization of Religion’ とは何か

キーワードは、「宗教のメディア化（mediatization of religion）」を近代西洋社会に特有の現象として分析している。また、その他の研究者たちもメディア化概念を分析する際、西洋社会に焦点を当てる傾向にある。日本国内の状況とはいえば、管見の限りでは、この概念に特化した研究は見当たらない⁸。あらゆる側面でグローバル化が進み、様々なメディアを通じて世界とつながるようになった現代において、メディア化の現象や宗教のメディア化の現象をたんに西洋の問題として片付けてしまってもよいのだろうか。日本人が西洋人ほど宗教に馴

染みがないとは言え、われわれにまったく関係のない問題とは言い難い。

ヤワードは「宗教のメディア化」論文の中で、「いかにしてメディアが宗教的変化を引き起こす主体 (agents) として働くのか」ということに注目し、その理論的枠組みを検討している⁹。彼の見解では、メディアは社会の中で一つの独立した制度へと発展してきた。その結果、他の制度はますますメディアに依存するようになり、メディアの理論¹⁰に適合しなければならなくなってきた。宗教は「メディア化^{メディアタイゼーション}のプロセス」を通じて、ますますメディアの理論に組み込まれてきているという。それでは宗教がメディアの理論に組み込まれるとは、具体的にどのようなことを意味しているのだろうか。そもそもメディア化^{メディアタイゼーション}とは、何を意味するのだろうか。

ヤワードによれば、メディア化^{メディアタイゼーション}とは、「長期に渡る社会的・文化的な変化」を意味する。それは、個性化、都会化、グローバル化、世俗化といった高度近代化の社会的・文化的変化をもたらすプロセスと同等のものとして考えることができる¹¹。もっとも彼は、メディア化^{メディアタイゼーション}の現象を限定的に捉えており、メディアが独立した諸制度となっている西洋社会のうちで見られる近代に特有の現象と捉えていることには注意すべきである¹²。またシュトレムベックも、メディア化^{メディアタイゼーション}という語が「多次的で本質的にプロセスに重点をおく概念¹³」であると述べている。彼とF・エッサーとの共同論文では、「メディアが益々大きな影響を与え、社会のそれぞれに異なった空間を深くまとめるようになる社会的変化のプロセス」を示すものであり、「より幅広く、よりダイナミックで、プロセスを重視した概念」であるという分析もしている¹⁴。さらには、F・クロッツも「歴史的で進行中の長期的なプロセスとして定義づけられるべきである¹⁵」と主張している。上記の研究者たちの間で共通している見解は、メディア化^{メディアタイゼーション}が「プロセス」を重視した概念であるということである。つまり、メディアの影響によっ

て社会のさまざまな領域が変化するその「過程」^{プロセス}に力点を置いている。

それに対して D・モルガンは、メディア化^{メディアタイゼーション}の諸理論がさまざまに論じるのは、コミュニケーションとメディアテクノロジー産業における構造的な変化が、政治、宗教、あるいは消費のような他の社会的領野のなかで激増しており、それらを変換していることだと分析している¹⁶。それゆえ彼の立場から見ると、ヤーワードが考えるメディア化^{メディアタイゼーション}は、「宗教、教育、政治のような伝統的に非-メディア的な社会圏へメディアの理論を伝播する一面的なプロセス」である¹⁷。筆者から見たとき、彼は、メディア化^{メディアタイゼーション}が近代や後期近代だけの現象とは考えておらず、むしろ mediation の理論を広げたいと考えているように思われる。さらにヤーワードが、以前は宗教制度によって支配されていた多くの作業をメディアが引き継ぐと主張することに対しても、モルガンは実際には宗教とメディアは近代においてかなり複雑な関係をもつことに注意を喚起している¹⁸。先のストレムベックは 2008 年の論文の中で、mediation とメディア化^{メディアタイゼーション}の 2 つの概念が、メディアと政治に関する変化を述べるために使用されてきたものの、適切に定義されるよりも多用されてきたことを指摘していた²¹。彼らの指摘もあってか、その後のメディア化^{メディアタイゼーション}に関する研究では、両者の区分を意識した論文が複数みられる²²。

たとえば G・マッツォレーニと W・シュルツツは、メディア化^{メディアタイゼーション}という語が、「近代マスメディアの発達の問題含みな付随物あるいは帰結を意味する¹⁹」としている。またそれは、mediation（媒介・調停・仲裁）とも区別すべきであるという立場をとっている。彼らによれば、mediation は「異なる行為者間、集合体間、あるいは諸制度間をそれぞれ調停したり、伝達したり、和解させるさまざまな作用」を中立的な意味で指し示している²⁰。

以上のような複数の分析から明らかなのは、メディア化^{メディアタイゼーション}概念が捉えにくく、これまでのメディア論の枠組みでは捉えきれない要素をもつ

ていることである。そのことを明確に示しているのが、ヤーワードによるパラダイム区分である。彼は、これまでのメディア論が大きく二つのパラダイムによって支配されてきたと指摘した上で、^{メディアタイゼーション}メディア化の理論がまったく異なる第三の立場を取ると主張する²³。彼によれば、これまでのメディア論のパラダイムとして、第一に、最も古いパラダイムは「メディア効果の諸理論」である。これは、メディアが社会的レベルと個人的レベルの双方で、態度や行動の変化を引き起こす諸方法と関わりがあるという。政治的プロパガンダの効果に関する研究やテレビスクリーンで暴力に晒されることで起こり得る様々な帰結に関するリサーチは、このパラダイムに該当する。そして第二のパラダイムは、「諸個人と社会的な諸々のグループが、様々な目的のためにメディアをどのように利用するか」ということに焦点が当てられたものである。いわゆる使用と満足に関するアプローチは、第二のパラダイム内部における一つの要素を表しているという。またヤーワードによれば、それはいかにしてメディア使用の特殊な形式が、異なるタイプの社会的かつ心理学的な満足によって動機づけられるかを研究してきた²⁴。

第一のパラダイムが、「メディアは人びとに対して何をするか」に主眼が置かれているのに対し、第二のパラダイムは、「人びとはメディアと何をするか」ということに関わっている²⁵。これら二つのパラダイムに対して^{メディアタイゼーション}メディア化の理論では、メディアが社会の外部ではなく、まさに社会構造の部分として捉えられる。それゆえ、上記の二つのパラダイムに対しても懐疑的な立場を取るという。なぜなら両方のパラダイムとも、メディアを文化と社会から別れたものとして概念化しているからだ²⁶。ヤーワードの分析に従えば、^{メディアタイゼーション}メディア化とはまさに社会の内部あるいは社会構造と一体化したものであり、相互に影響し合っているものとして捉えることができる。

さらにヤーワードは、^{メディアタイゼーション}メディア化が宗教の3つの局面の変換

(transformation) を伴うことを指摘する²⁷。それが「宗教のメディアタイゼーション
メディア化」である。それは第一に、宗教的な情報と経験は、一般的なメディアのジャンルに応じて、強く影響されるようになる。現実存在する宗教的なシンボル、実践、信念は、世俗的な問題や神聖な問題の両者についての物語の、メディア自身の語りのための素材になる。第二に、文化的で社会的な環境としてメディアは、制度化された宗教の文化的・社会的な多くの諸機能を取り入れてきたし、精神的な手引き、道徳的宗教心、儀式の進行、共同体や帰属の感覚を提供する。第三に、メディアは宗教についての情報を提供するだけでなく、物語やヴァーチャルな世界を創造する。彼によれば、この世界は、人々が宗教的な特徴のある経験をもつように誘惑する。さらにソーシャルメディアは、議論のための舞台を提供したり、似たような宗教的志向をもつ人同士にコミュニティの形成を提供したりするという。

以上のようなキーワードの分析を筆者なりに要約すれば、第一に、メディアの大幅な普及と拡大によって、メディアはわれわれの日常の至る所で使用され、社会や人々の生活を形成する一部となった。第二に、メディアが単に情報を伝達するという役割をはるかに超え、宗教的な儀式や体験、宗教的な癒しや教えなどを発信することによって、人々の精神をも支配するようになった。第三に、そのことは同時に、宗教のあり方をも変え、宗教が伝道を目的としてメディアを利用するというよりも、より日常性に入り込んだかたちで積極的な素材となるようになった。要するに、宗教のメディア化とは、宗教そのものがメディア社会の一部と化し、内部化したことを意味する。それはかつてのようにメディアを利用してプロパガンダを発信するというより、メディアを通じながら信仰や宗教的体験を共有したり宗教的な実践をする場として、実際に活用するものへと変貌したと言えるだろう。

ところで、以上の諸論が「宗教」ということで想定しているのは、どのようなものだろうか。彼らの多くがメディア化を西洋社会に特有

の現象として特徴づけていることから推測して、アブラハムに由来する三大一神教だろうか。宗教のメディア化メディアタイゼーションに関して、次に筆者が注目したいのは、デリダの論考である。というのも、デリダは哲学的な視点から、宗教のメディア化メディアタイゼーションがキリスト教に特有の現象であると考えているからだ。

2. 「宗教」の意味論的二源泉——「re-」による「再 - 結びつき」

2001年に出版された『宗教とメディア²⁸』という論文集の中に、デリダの「All Above, No Journalists!」という論考が所収されている。その中でデリダは、「グローバル化された宗教のメディア化メディアタイゼーションが、根本的にキリスト教的」であることを指摘しながら、なぜこの現象が、ユダヤ教、イスラム教、仏教などではないのかと問いを提起している²⁹。もちろんデリダは、宗教のメディア化メディアタイゼーションの現象そのものに関しては、全ての宗教にあると認めている。しかし彼の思想のなかで注目すべきなのは、彼が「キリスト教のメディア化の力と構造のうちには、絶対に唯一の特徴がある³⁰」と考えていることである。そしてデリダはそれを「世界ラテン化 (mondialatinisation)³¹」と名付けている。

デリダはなぜ宗教のメディア化メディアタイゼーションがキリスト教に特徴的な現象と見なしているのだろうか。本節と次節でこの問題について考察することにする。本節では、宗教の問題を語源に遡って考察する。また次節では、メディアという観点から検討することにしたい。そうすることで、メディアと宗教との関係が明らかになるだろう。

まずデリダは、テレビの宗教番組について語り始める。デリダによれば、多くのキリスト教者たちの間では（他の諸宗教とは対照的に）神と信徒の交わり／聖餐 (communion)、真の精霊の到来、ある意味での聖餐 (the Eucharist)、そして奇跡さえもがカメラの前で生じるという特異性がある。他の諸宗教においては、宗教的なことが話される

ものの、神聖な出来事そのものがカメラの前に現われる人々の実際の身体のうちには起ることはない。神の顕現／受肉、仲介者、「これは私の体である (*hoc est meum corpus*)」、聖餐／聖体といった、神が見えるようになることは、キリスト教徒をユダヤ教やイスラム教から区別するある種の構造と結びついているとデリダは言う。

またデリダは、ヨハネ・パウロ2世のメディア戦術の鋭さを指摘してもいる。パウロ2世は、今日のメディアテクノロジーの力をいかにして世界中で利用するかということをよく理解していた。しかも「ローマカトリック教会は、今日唯一のグローバルな政治的制度³²」でもある。デリダがこのような指摘をするのは、教会の歴史と教会の諸制度の構造を福音書（キリスト教の良き知らせ、顕現、真の精霊や福音主義、殉教、復活）に関係づけて考える重要性を強調するためである。というのも、それによってテレビで放送されるような宗教のグローバル化が、同時に宗教概念の「世界ラテン化」であるということが理解できるからだ³³。

デリダは90年代に『信仰と知³⁴』というタイトルで、宗教と遠隔科学技術・メディアについて語りながら、「『宗教』を考えることは、『ローマ的』なもの考えること³⁵」であると述べていた。そして「世界ラテン化」を「神の死の経験としてのキリスト教と遠隔科学技術的資本主義の結合」として語っている。デリダがこのような「世界ラテン化」という言葉を用いるのは、もはやわれわれの世界がインターナショナルやグローバルゼーションなどのような言葉では表現しきれない世界へと入り込んでいると認識しているからだ。様々なメディアを通じて伝播される法王の平和宣言が示しているように、「世界ラテン化」は平和という名で遠隔科学技術的な理性を伴いながら接近してくる。信仰と知、宗教と科学が、まさに不可分なものとして世界中に非局在化している。

さらにデリダは、バンヴェニストを参照しながら、「われわれが

『religion』と呼ぶものには、インド=ヨーロッパ語に『共通の』用語はない」と、注意を喚起する³⁶。というのも、インド=ヨーロッパ人は、religion という「どこにでもある現実 (réalité omniprésente) を独立した制度³⁷」として考えておらず、今でもそうした場所があるからだ。バンヴェニストによれば、「religion」を表す「単一で一定した呼称が見られない」のは、その「概念自体の特質」が関係している³⁸。というのも、religion の基となるラテン語の religio は、西欧諸語で唯一安定した用語と考えられていたものの、それがいったい何を意味するのかについては古代より論争が続いていた。そこには主として2つの解釈があり、一つには legere〈集める〉に結びつける解釈、そしてもう一つには ligare〈結びつける〉によって説明する解釈があった。前者はキケロによる解釈であり、後者はラクタンティウスとテルトゥリアヌスによる解釈である。

バンヴェニストは、religio が「本来〈宗教〉を意味してはなかった」ことを証明するために、意味の二源泉に遡行する。結論を先取りするならば、バンヴェニストが「たった1つの解釈しか許さないように思える」と述べながら、religio の起源として選んだのは、キケロの解釈 (legere) であった³⁹。Religio は「新たな選択のために再び取る、以前のやり方に立ち戻る」ことを指し、その本義が「すでに行なった選択をやり直すこと、その結果としてなされる決定を訂正すること」にあると述べるに到る⁴⁰。本来、宗教とは何の関係もないはずの religio が、なぜ神や信仰と深い関係をもった、いわゆる「religion (宗教)」の意味を持つようになったのか。そして何故それは「キリスト教のもの」なのか。それには先に示した後者の解釈、すなわち religio を re-ligare〈再び-結びつける〉によって説明しようとする解釈が深く関係している。

バンヴェニストによると、後者の解釈をしたラクタンティウスにとって、religio は「われわれを神聖に〈結びつける〉信仰の〈絆〉⁴¹」を意味した。つまり、ラクタンティウスが ligare〈結びつける〉と言

うとき、それは神と私とを〈結びつける〉ことを意味した。キケロが生きていたのが紀元前であったのに対し、ラクタンティウスが生きていたのは紀元3世紀つまり初期キリスト教の時代であった。しかもラクタンティウスは、初期キリスト教の著述家であり、神託を司った女預言者シビュラたちの言葉を本に集めて記録をしたり、コンスタンティヌス皇帝の息子の教師を務めたりした人物だった。このことに鑑みれば、彼の解釈はある意味で戦略的だったといえる。ラクタンティウスは、「もともと神に結びついていた人間がいったん神から離れたが、イエス・キリストを通じて再び神に結びつく⁴²」という意味を *religio* に読み込み、*re-ligare* 〈再び - 結びつける〉による解釈を提唱したのだ。その後、彼の説は、アウグスティヌスやトマス・アキナスなどによって支持され、「正しい解釈」として受け入れられるようになったという⁴³。バンヴェニストが述べているように、キリスト教徒にとって、「新しい信仰を異教から際立たせるものは信仰の絆」であり、*religio* 概念の改変は「人間がみずから神との関係を打ち立てるという考え方」に基づくものであったのだ⁴⁴。

このような意味論的な二源泉の相違は、デリダにとって「疑いなく刺激的」なものであったが、結局のところそれは限られた射程しか持たないと言わざるを得ない。なぜならその源泉がどちらの場合であろうと、「*re-*」という接頭辞に関わっているかぎり、「自分をまず自分自身に結びつける執拗な結びつき関係に関わっている⁴⁵」とデリダは考えるからだ。デリダにとって問題なのは、まさに「*religion*」が、集合、再 - 集合 (*ré-assemblément*)、再 - 収集 (*ré-collection*) であり、完全に引き離された絶 - 対的他性 (*l'altérité ab-solue*) に対する一つの抵抗 (*résistance*) あるいは一つの反動 (*ré-action*) ということである。つまり、M・ナースが二つの語源 (*re-legere* と *re-ligare*) の「*re-*」が「第三の可能性をほのめかしている⁴⁶」と述べるように、デリダにとって宗教 (*re-ligion*) の問題は、応答 (*re-sponse*)、責任 (*re-sponsibility*) との関

係のうちでさらに考察されなければならない⁴⁷。

3. キリストという「メディア」——秘密と亡霊、そしてメディア化

前節では、宗教という語の語源に遡ったが、本節ではメディアの原義について検討することにしたい。それによって、メディアと宗教の語源的な関わりを明らかにしたい。メディアという語は、その原義である中間・媒介・媒体 (medium) や仲介・媒介・調停 (mediation) からも推測されるように、派生語としての仲介者 (mediator/ The Mediator) にはイエス・キリストの意味が与えられている。これは文字通りに、神と人とを仲介する者であるからだ。メディアという語で興味深いのは、初期の「メディア」という語の使用法である。S・クレマーによれば、この語には2つの重要な使われ方があった⁴⁸。一つは、ギリシア文法のなかで、能動にも受動にも影響を受けない中間の態を表していた。これは「する」と「される」のあいだを指し、作用と反作用のあいだの混合形式をなす行為であった⁴⁹。もう一つは、三段論法の間概念、いわゆる大概念と小概念を媒介する媒概念を指していた⁵⁰。この2つの用法からも分かるように、そして彼女が強調するように、「中間こそがメディアの場所」なのである⁵¹。

上記の点を強調した後、クレマーは「中間」には3通りの理解が可能であると述べている⁵²。第一に、空間的に「あいだ」の位置を占めること。第二に、機能的に媒介者であること。第三に、形式的に中立化することである。以上のことから、彼女の理解を敷衍して考えれば、まさに仲介者イエス・キリストが、3通りの働きをしていることが見てとれる。すなわち、第一に、神と人との「あいだ」を繋ぐ者。第二に、神の御言葉ロゴスを伝える媒介者。第三に、神でも人間でもない、あるいは神でありかつ人間でもある中立者である。こうしてまさにイエス・キリストこそが、The Mediator と呼ぶに相応しい存在であるこ

とが理解できる。そして彼こそが神と人類との間に交わされる「新しい契約の仲介者／仲立ち⁵³」であり、神の御言葉^{ロゴス}を伝える媒介者でありかつ、唯一の中立者と呼ぶことができるのである⁵⁴。

以上のように、メディアとは、本来的な意味でも現在の意味でも「中間」をその本質的な要素としてもっていると理解できる。現在では、マスメディアからソーシャルメディアまでその形態は様々であるが、いずれも中間・仲介・媒介などを意味していることは同じである。以上のことを前提にしながらここで注目したいのは、メディアの機能である。つまり、遠く離れた空間を行き来してメッセージを届ける、メディア特有にして最大の働きである。デリダはそれを遠隔メッセージと呼ぶ。今ではどれだけ空間的に離れていようとも、テレビやラジオを視聴したり、インターネット環境さえ整っていれば誰でもメールを送受信したりできる。こうしたことは便利な反面、デリダに言わせれば、結果として「私的でも秘密でもない空間の中で（メッセージが）瞬時に送ったり受け取られたりする⁵⁵」ことを意味する。つまり、何かを媒介して伝える以上、もはや完全なる私的空間を保つことは不可能である。そこにはつねに媒介するための空間が開かれており、秘密が破られる可能性が含まれている。

というのも先述した通り、「媒介」とは「中間」を意味しており、何かと何かを繋ぐことが含意されている。ところが「秘密 (secret)」とは、se- (離れて) -cret (分けられた) のものであり、何かを媒介してはならないものである。その意味で、デリダが述べるように、秘密 (se-cret) とは「絶対的なもの (ab-solutum) そのもの⁵⁶」である。なぜなら、「絶対的なもの」もまた、ab- (分離、離れて) -solutum (束縛のない、結びつきのない) のものであるからだ。秘密とは、いかなる結びつきからも分離されていなければならない。しかしその絶対性を破壊するのがメディアである。メディアは、結びつきのなかったもの同士の間介在することによって、隔たりを繋ぐ中間項であり、媒介

項だからだ。

デリダは、遠隔メッセージによって秘密を破ることが、宗教的な構造を含意すると指摘している。そしてデリダによれば、その構造もまた、キリスト教に深く関わっている。つまり、この場合、宗教的構造とは、ある公的なメッセージを、宗教が精神に対して語る様々な物事にたとえることである。例えば、キリスト教を特徴づける受肉のプロセスそのものや、聖書に見られる「これは私の体である」という表現、そしてパンを体内へ取り入れる聖餐式などに、宗教的構造が見られるのである。これらの具体例はいずれも、キリストの死せる身体のスピリチュアル化であり、スペクトラル化（亡霊化）であるとデリダは言う⁵⁷。そして、メディアを通じて間接的に送られるメッセージもまた、「使徒（天使や福音伝道者）と同様に、こうした亡霊化（spectralization）を産み出すかあるいは含意する⁵⁸」と言うのである。

こうしたデリダの主張を、筆者なりに解釈すれば、大きく分けて2つのことを意味している。第一に、「宗教」（キリスト教）と「秘密」の関係であり、第二に、遠隔メッセージと亡霊化との関係である。

まず、「宗教」と「秘密」との関係について考えてみよう。アブラハムに由来する唯一神とは、本来、「絶対的なもの（ab-solutum）」であり、「絶対的他性（l'altérité ab-solue）」であり、それゆえに決して近づくことのできない存在のはずだった。ところがイエス・キリスト（The Mediator）という媒介が現われたことにより、その絶対性としてのab-（離れて）-solutum（結びつきのない）はずのものが結びついてしまった。御言葉としての神は、イエスという人間性をもった肉体となって、人間の前へと顕現する⁵⁹。人間から絶対的に分離されているはずの神は、仲介者イエス・キリストとなり、神の御言葉^{メッセージ}を人々へ伝える。仲介者の顕現によって、絶対的なものとしての秘密（se-cret）は破られたことになる。前節で見た、religionの語源としてのre-legereとre-ligareが「結びつく」ことに関わっていたことを思い起こしてみれば、

この語がキリスト教的なものであることが再び理解される。

次に、遠隔メッセージと亡霊化との関係について検討してみよう。ただし筆者が理解する限り、この関係については問題があるように思われる。そこでまず、受肉や聖餐式のような儀式が亡霊化であるというデリダの主張を確認してみよう。

周知のように、聖餐式では「これは私の体である」というイエス・キリストの言葉にならない、スピリチュアル化されたパン（イエス・キリストの身体）を信徒たちは食する。その儀式は、キリストの身体を、パンとして（パンというメディアを介して）体内化することを意味するのであり、同時に神の御言葉を体内化することでもある。それが亡霊化であるとデリダが語るのは、実際にイエス・キリストが現前していないにもかかわらず、信徒たちが食するパンに御言葉が宿っているからだ。しかも、メディアの観点からすれば、神の御言葉をイエス・キリストが媒介し、そのキリストの身体をパンが媒介するという意味で、二重のメディア化が存在していることになる。それゆえ、パンを食することによって、キリストが体内化され、キリストを体内化することで、神の御言葉を体内化することになる。

またデリダは、様々なテキストで度々亡霊 (spectre⁶⁰) という語を使用してきた。特に、メディアと亡霊化を語る上で重要な『テレビのエコーグラフィー』（1996）の中で、デリダは、この亡霊という語について、「スペクタクル的なもの〔見ることに関すること〕⁶¹」を意味しているが故に、「見えること (visible)」に関わっていると述べている。しかも亡霊とは「目に見えない見えるもの (du visible invisible)」であり、「なま身に現前することがない身体の有視性 (目に見える状態)⁶²」を意味する。それゆえ、亡霊は現前もしないし、不在でもない。またそれは、純粹に生きているのでも純粹に死んでいるのでもなければ、魂でも身体でもなく、あるいはそれらすべてでもある。

しかし、亡霊が単なる見えないものではないことに注意しなければ

ならない。デリダによれば、少なくとも「肉体の見せかけなしに幽霊 (fantôme) などありえず、精神=霊の亡霊化 (devenir-spectre de l'esprit) などけっしてない⁶³」。それゆえ、亡霊が「目に見えない見えるもの」になるためには、つまり亡霊化するためには、幽霊的なものが身体へ回帰する必要がある。その意味で、亡霊発生のプロセスは「逆説的な体内化」に対応していると言することができる⁶⁴。つまり「いったん観念や思惟をその基底から引き離したあとで、それらに身体を与えて幽霊的なものを産み出し」、その観念や思惟を「別の人工的な身体に、代替器官的な身体に、精神の幽霊に受肉させる」ことによって、亡霊は発生するのである⁶⁵。以上のようなプロセスを考えるならば、キリスト教的な聖餐式もまた、まさにデリダが述べる亡霊化のプロセスとアナロジーに考えることができる。端的に言えば、神の御言葉^{メッセージ}を伝えるために受肉されたイエス・キリスト (The Mediator) は、現代においては精神=霊となって聖餐式のパンへと受肉され、パンを食す信徒へと体内化されることで、スピリチュアル化され亡霊化されると考えられるのだ。

これまでの考察から、受肉や聖餐式のようなキリスト教的な儀式がスピリチュアル化であり^{スペクトル}亡霊化であるというデリダの主張は、とりあえず理解することができるだろう。しかし、このように考えることによって、キリスト的儀式などが説明されたとしても、それが遠隔メッセージの亡霊化へとそのまま応用可能なのだろうか。確かに、デリダの言うように、メディアから発信されるメッセージもまたわれわれの内へと取り入れられ、精神あるいは思想のうちへと内部化される。その意味で、メッセージは、知らず知らずのうちに内部化してしまうがゆえに、われわれの中に在るとも無いとも言えないし、記憶のように、亡霊的に回帰するものかもしれない。また、デリダが亡霊という語で示そうとしたのは、いかなる二項対立的な言説にも属さない、ある種の両義性であったことを考えれば、確かにメディアのメッ

セージもまた両義性をもった存在者であると考えられることは可能である。

けれども、メディアの亡霊化を、デリダが述べるようなキリストの身体のスピリチュアル化などの構造とともに語るためには、メディア自体がキリスト教的な亡霊化作用をもつのであるということであらためて明らかにしなければならないだろう。さらに、デリダが言うように、われわれの世界が「世界ラテン化」を避けられないのであるならば、宗教のメディア化メディアタイゼーションもまた「世界ラテン化」と切り離すことのできない関係を持っているはずだ。

デリダは、「今日では、宗教の遠隔視覚的グローバ化（the televisual globalization）が同時に、宗教という概念そのものの、ひとつの『世界ラテン化』であることを理解すること⁶⁶」が重要であると述べていたが、「宗教の遠隔視覚的グローバ化」とは「宗教のグローバル化されたメディア化メディアタイゼーション」であり、まさに今日では、より多様なメディアによってメディア化が進んでいることを考慮しなければならない。

おわりに

デリダが90年代のはじめから指摘していたように、「公／私を分ける境界線はかつてないほど保証されておらず、絶えず移動している場所⁶⁷」でわれわれは日々の生活を営んでいる。デリダの死後、10年が経った今日、テクノロジーはさらなる発達を見せた。ソーシャルメディアに代表されるように、われわれは公共空間の中にある種の私的空間を作ったり、私的空間を公共空間化したりと、完全なる公的空間でも完全なる私的空間でもない空間を形成することができるようになった。公的でもなく私的でもなく、公的でもあり私的でもあるような空間で、現代のわれわれはメディア化時代メディアタイゼーションを生きている。

もしもデリダが述べたように、「世界ラテン化」が避けられないも

のとして到来しており、その中で宗教のメディア化^{メディアタイゼーション}が進行しているのだとしたら、われわれは亡霊化された宗教的メッセージに気付くことなく、体内化してしまっているのかもしれない。そしてS・マルジェルが語ったように、「これ以後、宗教はどこにもありかつどこにもないものとなる⁶⁸」ならば、ウィルスのように強い感染力をもった亡霊たちが、メディア化^{メディアタイゼーション}のプロセスの中で蔓延しているのかもしれない。われわれが日常の中で体得する思考の仕方や価値観も、おそらくは「世界ラテン化」の中で形成された産物と言えるだろう。

さらに、「はじめに」で述べたようなテロリズムの危険性を考えるならば、われわれが利用するメディア空間の中には、すでに宗教に見せかけたある種のシミュラクルが忍び込んでいることにも注意を払わなければならない。彼らは、自らの目的を貫徹させるべく、さまざまなメディアを媒介しながら世界中の若者を勧誘し、今も大規模な暴力を目論んでいる。マルジェルは、普遍的正義が「世界規模に媒介化された正義」を意味するのだとしたら、「正義と平和の到来とがかつてないほどありそうもないものとして顕現するリスクが生じている⁶⁹」と述べていたが、まさにメディアを介したヴァーチャルリアリティの中で、さまざまな思想がグローバルな次元で「結びつき」、人々の思想と行動が操作されている。宗教とは何のためのものなのか。宗教なしに正義や平和は訪れないのか。宗教という亡霊に依存することなく、そしてメディア化^{メディアタイゼーション}の波にただ飲み込まれるだけになることなく、自律の精神によって安寧を希求することはできないのだろうか。

- 1 同組織は、2014年6月29日、「イスラム国 (Islamic State)」の樹立を宣言し、これまで用いていた「イラクとシリアのイスラム国 (ISIS)」あるいは「イラクとレバントのイスラム国 (ISIL)」の名称を廃止すると発表した。彼らの宣言を認めない欧米諸国や国連などでは、「ISIL」を使用しているが、報道機関や国によって呼び方は区々である。これまで「イスラム国」は複数の名前を持っていたが、その理由の一つには、彼らが周囲に対して新しいイメージを売り

込むためであるとも言われている。Cf. Charles River ed., *The Islamic State of Iraq and Syria: History of ISIS/ ISIL*, CreatSpace Independent Publishing Platform, 2014.

- 2 HUFF POST TECH, “SIS Use of Social Media Is Not Surprising” (Alessandro Bonzio, 2014.9.15)
- 3 現在、コペンハーゲン大学教授、1994年コペンハーゲン大学にてメディア学博士号取得。専門は、メディア、認知、コミュニケーション学。
- 4 彼は同名の主題にいくつかの副題をつけながら複数の論文を発表している。キーワードは、多くの論文の中で mediatization(-zation) という表記を用いているが、*Culture and Religion*, vol.12, No.2 (Routledge) 所収の論文では mediatization (-sation) とスペルを変えている。これについて筆者が本人に尋ねたところ、いくつかのジャーナルは British English による表記を好むため、語尾 (-sation) を変えたということだった。ただし、一般的には mediatization の表記の方が普及していることから (-zation) 表記を勧められた。
- 5 後述するように、この概念を一義的に理解することは難しい。それゆえ、十分な日本語を与えることは尚一層困難である。本稿では片仮名表記も検討したが、論文としての分かりやすさを優先し、暫定的に「メディア化」と訳してルビを付した。ちなみに、2011年に出版された『メディア用語基本事典』(世界思想社)では、「メディア化」という項目に mediatization の語が付されている。ただし本事典の当該項目の中でも、「(メディア化という言葉が) 厳密な学問的定義の要件を満たす用語ではない」と断りを入れているように、「メディア化」という日本語では十分に意味内容を表現しているとは言い難い。Cf. 渡辺武達、山口功二、野原仁編『メディア用語基本事典』世界思想社、2011年、pp.137-138。
- 6 1997年ミッド・スウェーデン大学にてメディア・コミュニケーション学修士号取得。2001年ストックホルム大学にてジャーナリズム学博士号取得。現在、ミッド・スウェーデン大学にて教鞭を取っている他、2014年より ICA Political Communication Division の議長職、The Swedish Media Council の顧問委員会のメンバーでもある。
- 7 もちろん mediatization という語そのものが使用されるようになったのは、最近のことではない。L・マウロが指摘しているように、ハーバーマスは『コミュニケーション的行為の理論』の中で言及しているし、ボードリヤールも『象徴交換と死』の中で用いている。しかしこれらのアプローチの中で使用されている mediatization は、現代の文脈で用いられているものとは関係がない。(Cf. Luis Mauro Sa Martino, *The Mediatization of Religion: When Faith Rocks*, Ashgate

- Publishing Limited, 2013.) またこの指摘は、あくまで英語訳版である。ハーバーマスの原文では *Mediatisierung*、ボードリヤールの原文では *mediatisation* を用いている。
- 8 メディア学一般の問題は、山口功二他編『メディア学の現在』世界思想社（2007年）などが詳しい。
 - 9 Stig Hjarvard, 'The Mediatization of religion: A theory of the media as agents of religious change', *Northern Lights* Volume 6, Intellect Ltd, 2008, p.11.
 - 10 ここでは、「メディア論理 (Media logic)」と差異化するために、「メディアの理論 (theory of media)」と訳した。Media logic とは、Altheide と Snow が一般的なメディア文化と特殊なニュースの産物に関する明確な枠組みを示すために1979年に初めて用いた語である。Cf. David L. Altheide and Robert P. Snow, *Media Logic*, Sage Publications, 1979.
 - 11 Cf. Stig Hjarvard, 'The mediation of religion: Theorising religion, media and social change', *Culture and Religion*, vol.12. No.2, Routledge, 2011, p.120.
 - 12 またキーワードによれば、メディアと宗教との間の接点に関する理論は、文化的・歴史的な諸々の文脈のうちで考察しなければならない。Cf. Stig Hjarvard, *The Mediatization of religion: A theory of the media as agents of religious change*, *Northern Lights* Volume 6, Intellect Ltd, 2008, p.11.
 - 13 Jospser Strömbäck, "Four Phases of Mediatization: An Analysis of the Mediatization of Politics", *Politics* 13(3), Sage Publications, 2008, p.228.
 - 14 Jospser Strömbäck and Frank Esser, "Making sense of mediatization of politics", *Journalism Studies*, Routledge, 2014, p.244.
 - 15 Friedrich Krotz, 'A Concept with which to grasp media and societal change' *Mediatization: Concept, Changes, Consequences*, Peter Lang Pub, 2009, p.24.
 - 16 David Morgan, 'Mediation or mediatization: The history of media in the study of religion', *Culture and Religion* Col.12, No.2, Routledge, 2011, p.137.
 - 17 D. Morgan, *ibid.*, p.140.
 - 18 D. Morgan, *ibid.*, p.141.
 - 19 Gianpietro Mazzoleni and Winfried Schulz, "'Mediatization" of Politics: A Challenge for Democracy', *Political Communication*, 16:3, Routledge, 2010, p.249. また H・Wijfjes は、メディアと政治の間の動的な関係を説明しようとする際に、mediatization の概念が用いられてきたと述べている。Cf. Huub Wijfjes, *Mediatization of Politics in History*, Peeters Bvba, 2009.
 - 20 G.Mazzoleni and W.Schulz, *ibid.*, p.24.

- 21 Jesper Strömbäck, 'Four Phases of Mediatization: An Analysis of the Mediatization of Politics', *International Journal of Press/ Politics* 13(3), 2008, p.228.
- 22 たとえばモルガンは、mediation の用法を次の 2 つに区分している。第一に、近ごろのハイテクメディア理論を指すために用いられる。第二に、一つの共有された現実感を構成する手助けをするような仕方では社会を支配するようなメディアを指すために用いられる (D. Morgan, *ibid.*, p.138.)。mediality や medialization などの概念と mediatization との比較および概念の詳細については、以下を参照されたい。Knut Lundby, *Mediatization: Concept, Changes, Consequences*, Peter Lang Publishing, 2009. その他、以下も詳しい。Sonia Livingstone, "On the mediation of everything" *Journal of Communication*, 59(1), 2008, pp.1-18.
- 23 Stig Hjarvard, 'The mediatisation of Religion: Theorising religion, media and social change', *Culture and Religion*, vol.12, No.2, Routledge, 2011.
- 24 Stig Hjarvard, *ibid.*, p.121.
- 25 Stig Hjarvard, *ibid.* (強調・筆者)
- 26 Stig Hjarvard, *ibid.*
- 27 Stig Hjarvard, *ibid.*, p.124.
- 28 本書は、H・デ・ヴリースと S・ウェーバーが編者となって、計 25 名の思想家たちの論考が収められている。編者が述べているように、本書には古くて新しい mediatization の形式が複数収められている。Cf. Hent de Vries and Samuel Weber, *Religion and Media*, Stanford University Press, 2001.
- 29 Jacques Derrida, "All Above, No Journalists!", *Religion and Media*, Stanford University Press, 2001, p. 58. (以下、*AANJ* と略記) またデリダは、旧約聖書に登場するイサク奉献の物語を取り上げながら、^{メディアタイゼーション}メディア化の意味を問い直す。ただしその場合の mediatization とは、私的領域の秘密が公共化する問題を扱っており、前節で論じたような現代的な意味とは異なる。イサク奉献に関連する秘密とメディア化の問題については、紙幅の都合上、別項で論じる予定である。
- 30 Derrida, *AANJ*, p.58.
- 31 後述するように、デリダはこの概念を 90 年代から用いている。
- 32 Derrida, *AANJ*, p.59.
- 33 Derrida, *ibid.*
- 34 この論考には、「たんなる理性の限界内における『宗教』の二源泉」という副題が付けられている。もちろん、カントの「たんなる理性の限界内の宗教」(1793) とベルクソンの『道徳と宗教の二源泉』(1932) が示唆されている。本稿では敢えて「意味論的な二源泉 (les deux sources sémantiques)」にのみ触

れたが、『信仰と知』の中でデリダが述べる「宗教」の二源泉とは、「信じること (la croyance) の経験」と「神聖性 (la sacralité)、聖性 (la sainteté)、無傷なもの (l'indemne) の経験」を指している。また『信仰と知』(1996) は、1994年イタリアのカプリ島で行なわれた「宗教」をテーマとする会議に参加し、そこでの発表をまとめたものである。Derrida Jacques, *Foi et Savoir: Les deux sources de la «religion» aux limites de la simple raison*, Éditions du Seuil, 2000. (以下、FSと略記) なお、英米系研究者の多くが、英語版を使用しているため、筆者も適宜英語版を参照した。Gil Anidjar ed., “Faith and Knowledge: The Two Sources of ‘Religion’ at the Limits of Reason Alone”, *Acts of Religion*, Routledge, 2002. (以下、ARと略記) また日本語訳は、松葉祥一、榎原達哉訳『批評空間』1996年、第2期11-14号を参照した。

- 35 Derrida, *FS*, p.13., *AR*, p.45.
- 36 Derrida, *FS*, p.56., *AR*, p.72. Cf. エミール・バンヴェニスト、前田耕作監修『インド＝ヨーロッパ諸制度語彙集Ⅱ王権・法・宗教』言叢社、1987年、p.257.
- 37 Derrida, *FS*, p.56., *AR*, p.72. バンヴェニスト、p.256。
- 38 バンヴェニスト、同上。
- 39 バンヴェニストは *religio* の形態を詳しく検討する過程で、その語が *ligare* 〈結びつける〉によって説明することが可能かどうかについて、3つの事例を挙げて比較しながら検証する。結果として、*religio* を *ligare* 〈結びつける〉によって説明することはできず、最終的にはキケロ説が有力であるとする。
- 40 バンヴェニスト、p.263。
- 41 バンヴェニスト、p.259。
- 42 長谷川洋三「『神の義』か『人間の理性』か (1) —古い知の枠組みは現代に通用するか」『早稲田社会科学総合研究』第3巻第1号所収、2002年、p.22。
- 43 長谷川洋三、同上。
- 44 バンヴェニスト、p.263。
- 45 Derrida, *FS*, p.58., *AR*, p.74.
- 46 Michael Naas, *Miracle and Machine: Jacques Derrida and the Two Sources of Religion, Science, and the Media*, Fordham University Press, 2012, p.63.
- 47 応答や責任(応答可能性)の問題はデリダにおける倫理の問題に関わっており、本稿では主題的に論ずることができない。これらの問題については別項で論じる予定である。
- 48 ジュビレ・クレマー著、宇和川雄他訳『メディア、使者、伝達作用——メディア性の「形而上学」の試み』晃洋書房、2014年、p.23。(Sybille Krämer,

Medium, Bote, Übertragung: Kleine Metaphysik der Medialität, Sufrkamp Verlag, 2008.)

- 49 またクレーマーによれば、この用法は「受信者でもあり送信者でもある、あるいは受信者と送信者の中間の位置」を占めるような両義性を担っていた。
- 50 たとえば、「すべての人間は死ぬ（大前提）。私は人間である（小前提）。ゆえに、私は死ぬ（結論）」という三段論法を考えてみた場合、「人間」という概念は、「私」と「死ぬ」との関連性を確保し、結論を導くための媒介作用をもった中間概念として扱われる。
- 51 またアリストテレスは、何かを見るためには「中間に介在する媒体によって作用を受ける」必要があることを指摘している。そして知覚的な中間（媒体）の特徴として「透明なもの（透明性）」を見出した。（中畑正志訳『魂について』『アリストテレス全集7』岩波書店、2014年、pp.94-99。）
- 52 クレーマー、同上。
- 53 「ヘブライ人への手紙」第9章15節『聖書』
- 54 ちなみに旧約聖書のヘブライ語には、仲介者や仲裁者をさすギリシア語のメシテースに相当する語はないとのこと。厳密な意味での仲介者が描かれるようになったのは新約聖書以降のようだ。Cf. X・レオン デュフル編、『聖書思想事典』三省堂、2007年、pp.593-594。
- 55 Derrida, *AANJ*, p.61.)
- 56 Derrida Jacques, 'I Have a Taste for the Secret' *A Taste for the Secret*, Polity, 2001, p.57.
- 57 Derrida, *AANJ*, p.61.
- 58 Derrida, *AANJ*, p.61.
- 59 「ヨハネによる福音書」第1章1節～17節『聖書』
- 60 この語をめぐるのは、デリダ研究者の中でも統一された訳語がなく、解釈が分かれるところである。東によれば、デリダは「spectre」だけでなく「revenant」も頻繁に用いており、両者はほぼ区別されていない。また「fantôme」「hantise」なども用いているが、それらにも大きな差異はない。以下、注(61)も参照されたい。Cf. 東浩紀『存在論的、郵便的 ジャック・デリダについて』新潮社、1998年、pp.54-55。
- 61 Jacques Derrida, *Échographies de la télévision*, Galilée, 1996, p.129.（原宏之訳『テレビのエコグラフィー』NTT出版社、p.187。）なお、本書の邦訳版では、spectreが「幽霊」、revenantが「亡魂」、phantômeが「亡霊」と訳されている。その他の箇所についても、解釈が異なる部分に関しては適宜日本語訳を変えている。
- 62 原訳では「骨と肉をもって現前することがない身体の視覚性」と訳されている。

- 原文では“la visibilité d'un corps qui n'est pas présent en chair et en os”となっており、“en chair et en os”は直訳すれば「骨と肉」だが、仏語イディオムで「直々に」「実物の」「まのあたりに」などの意味があるため、ここでは「なま身に」と訳した。なお、英語版でも“in flesh and blood”を使用している。Cf. Derrida, *ibid.* Jennifer Bajorek tr., *Echographies of Television*, polity, 2007, p.115.
- 63 Jacques Derrida, *Spectres de Marx*, Galilé, 1993, p.202. Peggy Kamuf tr., *Specters of Marx*, Routledge, 1994, p.126. 増田一夫訳『マルクスの亡霊たち』藤原書店、2007年、p.265。(以下、仏：SdM、英：SoMと略記)
- 64 Derrida, *SdM*, p.202. *SoM*, p.126. 邦訳、p.265。
- 65 Derrida, *SdM*, pp.202-3. *SoM*, p.126. 邦訳、pp.265-266。
- 66 Derrida, *AANJ*, p.59.
- 67 Derrida, *SdM*, p.89. *SoM*, p.51. 邦訳、p.122。
- 68 デリダが亡くなった2004年に、マルジェルは「信仰と知」というデリダと同じタイトルの短い論考を書いている。その中で彼は、宗教が、「多様な生産によって、直接的ないしは間接的な消費によって、自らを世界化し、メディア化しつつ、これ以後、宗教はどこにもありかつどこにもないものとなる」と述べながら、宗教は、「自らをメディア化することにおいてしか、もはや社会的かつ政治的な意味をもつことがない」と指摘している。セルジュ・マルジェル、西山達也訳「信仰と知——宗教的なものの本質、根本悪、近代という問い」『別冊 環 ジャック・デリダ 1930-2004』藤原書店、2007年、pp.170-186。(Sarge Margel'Foi et savoir: L' essence du religieux, le mal radical et la question de la modernité', *L'Herne 83 Jacques Derrida*, Éditions de l'Herne, 2004, pp.261-268.)
- 69 マルジェル、p.184。